

研究活動報告

特別講演会 (フランス・メレ氏)

2013年10月17日 (木) 14:00~15:30, 当研究所において, フランス・メレ氏 (フランス国立人口研究所) による “Divergence and convergence in life expectancy. A new approach to health transition” (平均寿命の発散と収束: 健康転換の新たなアプローチ) と題された特別講演が行われた。メレ博士は死亡, 健康転換, 死因とその長期展望, がんによる死亡・障害, 東欧・旧ソビエト連邦の健康危機などを専門として研究を行っているフランス国立人口研究所 (INED) の人口学者である。

現在, メレ博士は INED とマックスプランク人口研究所との共同プロジェクトである MODICOD (Mortality Divergence and Causes of Death) のプロジェクトリーダーを務めている。同プロジェクトは, 死因の長期系列の国際比較などを主な目的とした死亡に関する国際的研究プロジェクトであり, 日本からは筆者と是川夕研究員がこのプロジェクトに参加して研究協力を行っている。

今回の講演では, 歴史的な長寿化の流れの中で, 従来, 平均寿命が収束していくという展望があったにも関わらず, 依然として格差が存在することについて, 死亡率改善過程における平均寿命の発散と収束に着目する健康転換の新たなアプローチが提示された。世界的に平均寿命が伸長する中, いくつかの発展途上国ではこのような死亡率改善から取り残されてしまう事態が起き, また, 先進国の中でも東欧が1960年代半ばから平均寿命改善の停滞や低下を伴う健康危機に苦しんだ。一方で, 平均寿命の高い国々の寿命は改善を続け, 従来達成できないと考えられてきたレベルにまで到達するようになった。これらは, 健康転換が単調に進んでいく過程ではないことを示している。新たな技術革新の出現は, 一部の人口の死亡率を低下させ, これによって平均寿命発散の過程が生じるが, その後, その恩恵を得られなかった人口もキャッチアップをすることにより平均寿命収束の過程が生じる。しかしながら, この間にも別の技術革新による発散の過程は複合的に生じており, 死亡率改善が起きても平均寿命の格差は残ることとなるのである。

今回の講演で提示された, 健康転換を平均寿命の発散と収束の複合・継続過程として捉えるアプローチから, 改めて死亡率改善における様々な多様性の存在とともに, 死因の長期系列分析等を通じてこのような多様性を解明していく必要性を感じた。 (石井 太 記)

第33回日本年金学会 総会・研究発表会

2013年10月24日 (木) ~25日 (金), 東京都中央区の JJK 会館 2階多目的ホールにおいて第33回日本年金学会総会・研究発表会が開催された。二日間の開催日程の中で, 第1日目には自由論題報告, 第2日目には共通論題報告とシンポジウムが開催された。本年の共通論題及びシンポジウムのテーマは「働き方と年金」であった。

第1日目の自由論題報告では筆者を含めて6件の報告があり, 筆者は「外国人受入れが将来人口を通じて公的年金財政に与える影響に関する人口学的分析」との報告を行った。このほかにも年金の制度, 運用や海外の動向など, 年金に関する幅広い角度からの研究報告及び討論が行われた。第2日目は午前中に3人の報告者が, 共通論題である「働き方と年金」に関する研究報告を行った後, 午後, この3人をパネリストとするシンポジウムが開催された。 (石井 太 記)